

幼稚園の日常生活の中での保育者と 子どもの関わりを見つめる II

— 3歳児A男の生活の様子から —

実松 瑞栄
(山口大学教育学部附属幼稚園)

A Study of The Support in A Three Years Child

Mizue SANEMATU
(Received November 19, 1993)

キーワード 幼児教育 保育者の関わり 3歳児の幼稚園生活

I 研究の目的

今年度は、3歳児を担当することになった。

担任した子ども一人一人が、個人差を大切にされながら、3歳児にふさわしい生活をするなかで、3歳児の時期に大切な体験や経験を積み重ねていけるよう手助けしたいと思う。その為に、

- (1) 幼稚園の3歳児にふさわしい生活とは、どのような生活なのか
- (2) 3歳児の時期に大切な体験や経験とは、どのようなものなのか
- (3) そのような生活や体験・経験を支えるには、保育者は日々の生活の中で子どもとどのように関わればいいのか

という3つの視点から、日々の自分の保育記録を振り返り考察することを通して、幼稚園における3歳児保育のありかたを考える

II 研究の方法

- ・ 平成5年度の3歳児クラスの中から1人の男児(A男 5月生れ)の1学期(1993年4月～7月)の幼稚園での生活の記録を取り上げ考察する。
- ・ A男を取り上げた理由は、入園当初のA男の言動の中に、これまでの自分の経験や知識の範囲内では理解できないことがあり、A男の言動の背景や変化を探ることが必要だったし、そのことが幼稚園における3歳児保育のありかたを考えるための1つの手掛かりになると思ったからである。
- ・ A男のプロフィール
 - * 父(公務員)・母・兄(小1年)・本人の4人家族
 - * 住宅地だが、家の前を道路が走り、近くには子どもが遊べるような場所はない

* 5月の身長97、2cm、体重12、3kgの小柄な男の子

Ⅲ 研究の内容

- (1) 記録では、A男のたくさんの記録の中から下の3つの事項にあてはまるものをいくつか取り上げる。
- (A) 保育者が理解できなかったA男の言動の記録
 - (B) 保育者が意図的にA男に関わった時の記録
 - (C) A男の変化が感じられだした頃の記録
- (2) 考察では、これらの記録を考察することを通して、〈幼稚園における3歳児クラスの子どもにとってふさわしい生活〉 〈3歳児クラスの時期に大切な体験や経験〉 〈そのような生活や体験・経験を支える保育者の関わり〉について考える。

(1) 記録

<記録A 保育者が理解できなかったA男の言動の記録>

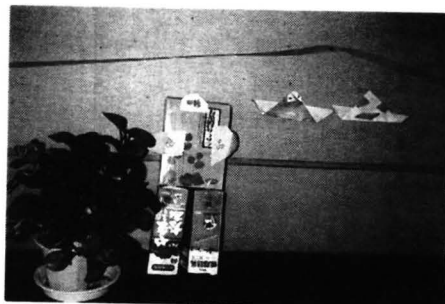
記録1 素敵な怪獣を作り、そのあとをきれいに片付ける 4月26日(月) 晴れ

良い天気。登園してきた子どもたちが、それぞれに、自分のしたいことを始めた。登園した時から「ニワトリさんに行こう」と保育者を誘い続けていたM子の要求にやっと応じることができる状態になったので、保育者は、M子と一緒に飼育小屋に行く。まだ保育者のそばでしか遊べないN子、I子も付いて来る

しばらくM子たちと飼育小屋で遊んだ保育者が保育室に戻ってみると、保育室で積み木や粘土や描いたり作ったりして遊んでいた子どもたちはほとんど園庭に出ている、A男が「先生、折り紙、出して」と言う。保育者は「はい、じゃ、ここに置きましょうね」と、折り紙の入った箱を机の上に置く。A男は、その箱から白色の折紙を1枚出して3角形に折り「姫山だよ」（近所の山の名前）と持ち歩く。

保育者が、園庭で遊んでいる子どもたちの様子をひとわり見回してまた保育室に戻ってみると、A男は何枚かの折紙と鋏をままごとコーナーの冷蔵庫の上に持って行き、そこで立って何か作っている。セロテープを使う度にセロテープカッターが置いてある棚まで走って行っているので保育者が、「これ、向こうに持って行くといいのじゃないかしら」とセロテープカッターに手をかけると、A男はそれをひたたくように取って冷蔵庫の上に持って行く。

保育者が、また、しばらく園庭の子どもたちとかかわって戻ってみると、冷蔵庫の上もその回りもきれいに片付いている。使わなかった折り紙、鋏、セロテープだけでなく、切り刻んだ紙屑まできれいに拾ってある。そして、A男は、両手に一つずつ自分が作った作品を持って、「ほら、怪獣だよ」と保育者に見せる。一つは、姫山だった白い3角形にピンクの目と口がついており、もう一つ



(A男の作った怪獣とロボット)

は、同じ様に3角形に折ったピンクの折紙の頂上が少し折り返してあり、その白いところに、黒マジックで目が描いてある。

保育者は、「怪獣?。うわー、上手だね」「片付けまでできたんだね。すごいなー」と感心したり誉めたりする。しかし、A男は少しも嬉しそうな顔をせず、その2つの作品を後ろの壁に貼ってくれと言う。そこには、去年の3歳児が作っておいてくれた花や動物が貼ってあったのだが、保育者がその間に貼ろうとすると「そこじゃない」「そうじゃない」とイライラと不機嫌な声で怒り、どこに貼ってもなかなか気にいらぬ。

* 保育者はこの日、初めてA男を3つの点から強く意識した。

1点目は、他の子がまだ鋏やセロテープをうまく使えなくてもあましている時に、手に切ったり貼ったりして、とても素敵な作品を作ったこと。

2点目は、作品を作った後が、あまりにきれいに片付けてあること。

そして3点目は、素敵なものができ、保育者に誉めてもらったのに少しも嬉しそうではなく、ずいぶん不機嫌だったことの3点である。

作ることも片付けることも、入園当初の3歳児にしてはあまりにもでき過ぎるように思うし、そんなにできて、ほめてもらって、それなのにどうしてそんなに不機嫌なのか理解できなかったのである。

記録2 こいのぼりの両面に対象になるように色をつけようとする 4月27日(火) 晴れ

全員の登園がすんで、それぞれに好きなことをして遊び始めたので、保育者は、こいのぼり(目、口、鱗を印刷したわら半紙を筒状に貼ったもの)をいれた箱を出してきて床に座り、1匹のこいのぼりに「こいのぼりさん、きれいな洋服にしてあげましょう」とつぶやきながらクレヨンで色をつけ始める。するとそれを見た子どもたちが、「僕もちょうだい」「わたしも」と寄ってきて、こいのぼりを持って行き、自分のロッカーからクレヨンを出してきて色をつけ始める。A男も、急いで1匹のこいのぼりを持って行って机につき、そこで黙々と色をつけ始める。

ちょっと色をつけただけで2個目を取りに来る子、ちょっと色をつけたものに割り箸や糸をつけて振り回したり、それを園庭に持って出る子、水道の所で泳がせたらしく「濡れた」と持って来る子……等々。そんな中でT男は1人、長いこと黙々と色をつけ続ける。しばらく後、「先生、疲れたから仕上げて」と言って持って来たのを見ると、片面の鱗がいろいろな色で丁寧に塗ってある。保育者は、「仕上げて」と言う言葉に驚きながらも、「きれいな洋服にしてあげたから、疲れたのね。はい、はい」と受取り、適当に色を付けようとする、と、「同じじゃないといけん」と強い口調で言う。保育者は、また驚くが、裏返して見ながら、同じように色をつける。他の子への応対もあって忙しいので、簡単に塗ろうとすると、「そうじゃ、いけん」と不機嫌に怒る。出来上がると後ろの壁に貼っておいてと言う。

* ちょっと色がつけば喜ぶ子どもたちの中であって、A男だけは、根気よく、いろいろな色を使って、丁寧に塗り上げるし、仕上げなければいけないけど、疲れたと言う。こいのぼりは、表と裏になっているのに、表裏対象に塗ることを要求する。そして、この日もまた、作った喜びは味わえていない様子。

3歳児の理解力や要求の程度としてはあまりに高すぎないか。こんな小さい時から作ることが喜びにならず義務となっているとしたらあまりに情け無い。どうしてこんなことになるのかと首を傾げてしまう。

記録3 絵本読む 4月30日(金) 晴れ

降園時、絵本『どうすればいいのかな』(文 渡辺茂男・絵 大友康夫 発行社 福音館)を読み聞かせる。絵本の内容は、熊が、上手にスプーンやフォークを使いこなせず、とうとうサラダもスパゲティもみんなごちゃまぜにして手づかみで食べる、という内容。多くの子が喜ぶ中A男は、「熊が手で食べるのはあたりまえだよ」とあたりまえの顔をして言う。

* この頃、A男は、降園時、椅子を皆とずいぶん離れた所に持って行って座ったり、椅子に座らず積み木に腰掛けたりし始めた。保育者が「そこじゃ見えないよ」と言っても聞こうとはしなかった。

また、保育者が、「赤い雨が降りました。青い雨も降りました」などとつぶやきながら画用紙に好きな色で線を引いていると「雨は白しかないんだよ」と言ったり、てんとう虫を見つけて「二星てんとうだよ、ほら」と見せたりした。赤い雨、青い雨などといいかげんなことを口走った自分を反省したが、他方で、この子の正確さへのこだわりも気になった。

なによりもまだ3歳児である。もっとアニミズム的な、あるいは空想的な世界で自由に遊べる豊かさや楽しさが大切ではないかと思う。

記録4 母親に洋服の端を持たれた状態でもがき続ける 5月7日(木) 晴れ

交通教室の後、各クラスごとに、年度当初の親子での懇親の会を持ち、自己紹介をしたり弁当やお菓子を食べながら懇談をしたりする。自己紹介は、母親が丸くなって座り、子どもたちも自分の母親の前に座り順番に自己紹介をしていく。

どの子も、途中から飽きてしまっていて動いたり話したりし始めたが、始めの間は行儀よく座っていた。そんな中でA男は、始めから母親の前に寝転んでおり、最後まで母親に洋服の端を持たれた状態でもがき続ける。

記録5 数字を書く、英語で数詞を唱える 5月12日(水) 晴れ

保育に参加した学生が、A男は、数詞を100近くまで唱えることができ、数字を書くこともずいぶんできる。また、英語でもかなりの数まで唱えることができる、と驚いて報告する。

記録6 手の中の丸虫を母親に取り上げられる 5月21日(金) 晴れ

降園時、保育者がさようならの握手をしようとしても手を出さない。母親が手を添えて無理やり出させると、A男は、「ほら」と言うように保育者の前でげんこつを開いて見せる。そこには、1匹の丸虫がいる。保育者が「あら、丸虫ね」と言う間もなく、母親はその丸虫を取り上げ、握手をさせる。

記録7 母親に「くそばばー」と言い、手をつながない 5月27日(木) 晴れ

降園時、A男は、U男と手をつないで1番前に並んでいたが、保育者が挨拶に行く前に、2人でさっさと門の方に行き始める。2人の母親は子どもの手を引いて引き返させ、1番後ろに並ぶ。A男は、母親の手を振りほどこうともがき、保育者の前に来ても握手の手を出さない。そして、周りの者がびっくりして振り向いたほどの強い口調で「くそばばー」と言い、手を後ろに回して母親と手をつなぐことを拒否したまますたと帰る。

- * この時のA男の様子には保育者も驚いてしまった。この日、A男はU男と降園時に手をつなぐことになるような関わりができてとても嬉しかったのだろう。その嬉しさは、いつものように母親の所に一目散に走って行って飛び付くことをしなくてもいいほどの、また、母親と手をつながないで門の方へ行きたくなるほどの喜びであったのだろう。それを理解しない母親へのいらだちは分かる。しかし、まだ5月の時期にこのように強く母親を拒否した子に保育者は始めて出会って驚いてしまう。A男の母親は、大きな目がすずやかなきれいに身づくろいをした人で、保育者にはこやかに丁寧に対応する人である。子どもも可愛がっている様子だし、言動に剣がある様子を見掛けたこともない。A男は、頭の良い知的好奇心が旺盛で手先も器用な子なのかもしれない。しかし、A男と保育者との自然な関わりがある前に、母親が「Aちゃん、おはようございますは」と促すようなところもあり、記録4、5、6、そしてこの記録7のようなことを合わせて考えると、母親が熱心すぎてすこし教育的になりすぎ、A男の自然な育ちが暖かく見守られるより、知的な能力が要求されているのではないかという疑問が生まれてきた。

記録8 おとなしそうな子にキックやパンチをする 5月11日(火) 晴れ

朝、誰かが崩した積み木の上を、A男とK男が渡り歩いている。(K男は、活動的に遊ぶよりも落ち着いて考えながら遊ぶ小柄な子で、A男とタイプが似ている子である) A男は、先程作ったブロックの剣を腰に差している。2人はそれぞれ勝手に遊んでいるようだったが、いきなりA男が、腰の剣を抜いてK男の頭を数回たたく。少し離れたところでブロックで遊ぶ子どもたちに関わっていた保育者が、「A男ちゃん、K男ちゃんが痛いよ」と言うとA男は「痛くないよ」と言う。保育者が再び、「じゃ、自分の頭をたたいてごらん、痛いから」と言うと、A男は自分の頭をコンコンとたたき「痛くないよ」と言う。それからまた2人は、別々に積み木で遊ぶ。K男は続けて積み木の上を歩くが、A男はゴチャゴチャの積み木の中に座り込み、何かぶつぶつ言いながら、ハンドルを動かすように1つの積み木を動かしている。何かになりきっている様子。

しばらく後、保育者がふと見ると、A男がK男を入り口のガラス戸に押し付けてキックしたりパンチしたりしている。K男は泣きそうな顔をしながらもされるままになっている。保育者は、あわてて2人を引き離し、「K男ちゃん、泣かないんだ、強いね」「A男ちゃん、K男ちゃんは痛かったんだよ」と言う。K男は「僕、ウルトラマンだよ」と言う。

- * 友達になりたいのだがどうしていいかわからないとき、子どもは、蹴ったりたたいたりすることがある。また、ウルトラマンや怪獣などになりきって、いきなり友達を

攻撃することも珍しくはない。A男もまだ3歳児だということだろう。ただ、A男の場合、K男がおとなしい子らしいということをすでに読みとって振る舞っているように思えることや、他の面がずいぶん発達しているのに比べると、友達関係の幼さが少しアンバランスに思える。

記録9 子どもたちがレコードに合わせて踊る時、1人でカスタを打つ 5月27日
(木) 晴れ

この頃、子どもたちは、曲に合わせて『たけのこ体操』をすることをとても喜んだ。この日も、降園用意をする前に、子どもたちの要求に応じてレコードをかけることにすると、子どもたちは、レコードがなり出す前から床にしゃがんで用意をし、笑顔いっぱい踊った。そんな中で、A男は1人カスタネットを持ってきて椅子に座って打つ。きちんと、タタタタタタタ|ウンタンタンウン|とリズムに合わせて打つ。

その日、保育に参加されていた大学のT先生が、1人だから手助けをとの思いから、カスタネットを持ってきて一緒に打とうとされると断ったとのこと。

- * A男が、皆と一緒に踊らずカスタネットを打つことは、この日だけではなかった。曲に、身体で反応しようが楽器で反応しようがかまわないのだが、全身で反応することを喜ぶ子どもたちの中で、手先と頭で反応することが少し気になった。また、この時のA男には、それなりの思いがあったであろうが、T先生の行動が暖かい気持ちからのものであるだけに、それを受け止めようとしめない態度もやはり気になった。幼い子が人の気持ちなど受け止める余裕がないことは良くあることだが、また1方、幼い子はずいぶんしっかりと人の気持ちを受け止めるものだとも思うからである。入園次の日に、この子は、泣いて園の中をさまよっていたと4歳児担任の保育者が連れてきてくれたことがあり、不安な気持ちを担任に寄りすがればいいのにと不憫に思ったことなど思い出したりした。

<記録B 保育者が意図的にA男に関わったときの記録>

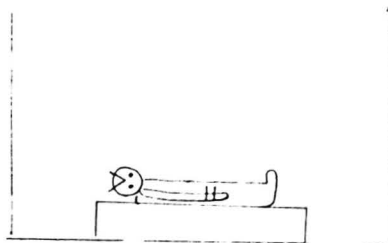
保育者は、記録(A)に述べたような疑問を感じながらも、他の子と同じようにA男に関わっていた。あちらにもこちらにも手がいることばかりで、登園時にしっかり受け止めることと、降園時に握手しながら言葉をかけること以外には、一人ひとりと特別な関わりを持つ余裕がなかったのである。

そんな中から、あえて言えばA男だからと言う思いで関わったと言えそうな記録を4個下に取り出してみる。

記録1 A男と2人で遊ぶ 5月19日 (水) 晴れ

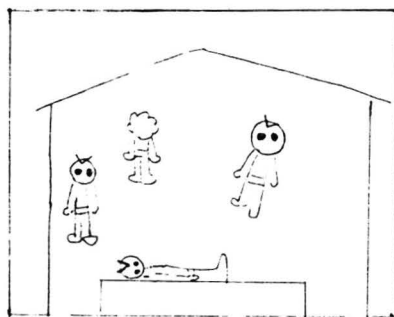
大学の幼稚園課程の3年生が5人、幼稚園教育基礎実習(1)の授業で保育に参加しているので、保育者は今日は他のことを気にかけず、A男だけに心を寄せ関わってみようと思う。しかし、A男は学生と一緒に園庭に出て学生のそばで遊ぶ。特別学生と関わりをもって遊んでいるようではないが、学生がいるところで遊びたいのならそっとしておこうと、

保育者は保育室でM子が廃材で何か作るという手伝いをする。そこへ、外でひと遊びしたA男が1人で帰ってきて、画用紙と鉛筆を持って保育者のそばに座る。そして、○を1つ描く。保育者は、「先生もA男君のように何か描こうかな」と画用紙と鉛筆をとり、A男と同じように○を1つ描く。A男は○にVを付け加え、「ウルトラマンだよ」と言う。保育者は、「へー、ウルトラマンってそんなになってるの。先生もウルトラマンにしてみよう」と同じように描く。A男はそれからどんどん描き始めるが、保育者は、M子の手伝いで続きは描けない。A男は、右図のような絵を描く。保育者が「ウルトラマン、寝てるのかしら」と言うと、A男は、描きかけの紙と鉛筆を持って机の所に行く。そして、そこで熱心に描き続ける。



(T男は描いたものを大切に持ち帰ったので筆者の描いたものである)

保育者は、M子の作品ができたので、A男の所に行き向き合って座る。A男は、3人のウルトラマンを描いている。保育者が「A男ちゃん、ウルトラマンを上手に描けるのね」「ここは、ウルトラマンのおうちなのかな」と言うと、A男は、3人のウルトラマンを家のようなもので囲み、その家の中にもう1人、花形の顔をした何かを描く。そして、「これ、○○マンだよ」(何マンだったのか忘れてしまった)と教えてくれる。保育者が「フーン。窓から入って来たのかな」と言うと、T男は家に窓をつけ、「ここから入って来てね。ウルトラマンをやっつけてね。ウルトラマンが、シューと天井に上がったの」と楽しそうに話す。保育者もクスクス笑いながら「そう。面白いの。天井にシューと上がったの」と言うと、A男はすっと膝に入って来る。それから、自分の作品を大事そうに鞆に入れる。



(同上)

- * 始めて、他の事に心を煩わせることなくA男と向かい合った一時を持てたが、A男はしたいことをし保育者は見守っただけ。保育者の方には、せつかくの機会、もっと心が通い合うような何かをしてあげたかったなという思いが残ったのに、A男はすっと膝に入って来たし自分の作品を持って帰りもした。今まで、透明なカーテンの向こうにいたA男が、そのカーテンを端に寄せて身を寄せて来たようで嬉しかった。

記録2 保育参加した母親と話し合う 5月28日(金) 晴れ

この日は、母親が、保育に参加する。A男は、登園後しばらくは、保育室で積み木に上ったりなどぶらぶらしている。明日は5月生まれの子の誕生会で、3歳組ではA男が祝ってもらうことになっている。保育者は、全部の子が登園して遊び始めたので、「A男ちゃんがお部屋に居てちょうどよかった。明日はA男ちゃんの誕生会ね。4歳になった手型をとろうね」と呼び掛け「何色にしようかな」と言うと、「黄色。ちがう。ほんとは青色。青色が好き」と言うので、水色の画用紙に、青色の絵の具を用意する。保育者が、「星組や風組のお兄さんやお姉さんにも名前や年を教えてあげてね」などと言いいながら

右手に絵の具をつけるのを、嬉しそうに聞きながら、ちゃんと手を出している。

3、4人の子に見守られながら、丁寧に絵の具のついた手を画用紙に押付けると、きれいな手の跡がつく。皆が、「うわー、きれい」と言うと、得意そうに手を洗いに行く。そして、他の子が、「ほくも」「わたしも」と言っている言葉を尻目に、スキップするような足取りで外に出ていく。母親は、そんなA男の様子をにこやかに見守っていたが、A男のあとから一緒に付いて出て行く。

保育後、その日保育に参加した4人の母親とミーティングをする。

A男の母親は、他の子の母親が子どもたちの遊びの様子を話すのを、楽しそうに、時に笑い声をあげながら聞く。そして、自分の話す番が来たとき、

- ・ A男は、吊り橋を渡ったときが1番楽しそうだったこと、
- ・ H保育者が、アヒルの水浴び場を作るために土おこしをしていて、ミミズが出てくると周りで見ている子に渡していた。渡された子はそのミミズを鶏にやっていた。A男はミミズをもらったが、鶏にやることはできず他の子に渡したと話す。
- ・ 保育者は、A男が虫に興味を示すこと、これまで、保育室で描いたり作ったりして遊ぶことが多かったけど最近外に出ていくことが多くなり、ここ数日は砂場で御馳走作りに一人で没入していること、しかし、洋服を濡らしたり汚したりして着替えるようなことはなかったことなどを話す。すると、母親は、家の前が車の通る道路であることと、兄が家の中で描いたり作ったりして遊ぶことが好きで一緒に家の中で遊び、戸外で遊んだことはあまり無かったことなど話す。
- ・ 保育者が、園で家と異なった経験ができることを大切にしようということや、幼児の時には、全身で遊んだり全身で物事を受け止めたり感じとったりすることが大切なのだということ話をすると、深く頷く。
- ・ もうミーティングを終わろうという時、A男の母親が質問なのですがと皆を引き止める。そして、A男が、時に非常に不機嫌になって言うことを聞かなくなる時があるのだが、そんな時どうしたらいいのだろうかと先日、「くそばばー」と蹴ったり叩いたりした時（記録Aの7）恥ずかしくてうわべだけを取り繕うような押さえ方をしたことを1例として話す。上の子にはこんなことはなかったし、どこでこのような言葉を習ってくるのかと戸惑うとのこと。
- ・ H子の母親が、「ありますよね」とうなづき、わが子が、時に「くそばばー、くそじー」などと言うこと、子どもだからと祖父母が大目に見てくれること、自分が忙しくしているようなときにやはり子どもが荒れた言動をすることなど話す。
- ・ ありのままの姿を子どもが出せることを大切にすること、どの子にもいろんな状態の時がありお互いさまだから恥ずかしいと思わなくていいこと、原因があるのなら考えてみることも、でも、おおらかに受けとって見守ることも必要なことなど、皆で話し合う。

* 母親が子どもの前に出て言動を指示したり、直接にそんな言動はしなくとも母親の願いがA男の言動を左右するようなことがあるのではないかと思っていたが、そんなことはなかった。A男の母親は、A男の様子を1歩下がってしっかり見つめ見守っているようだった。また、戸外で遊んだことはほとんどなく、家の中で本を見たり作っ

たり描いたりして遊んでいたということも、周囲の環境がそうさせたり両親や兄とともにこの子がそうした方面に興味を持つ子だったからであり、母親がことさらそうした方面に価値をおき、仕向けたからではないようであった。

冷静で知的で、熱心で几帳面な母親のようであった。(その後、付き合いが深くなるにつれ、協力的で誠実な人柄を感じる) 幼児期の子どもの生活をどう考えるかということについては、保育者と担任したすべての子どもの母親とが話し合いながら学び合っていくことであり、T男の母親ともこれからの課題である。今回は、とにかく、お互いを少し理解できたことや、子どものことは、ありのままの姿を保育者と一緒に見つめていくのであり、保育者に遠慮などしなくていいのだと思ってもらえたようで嬉しかった。

< 記録 C A男の変化が感じられだした頃の記録 >

記録1 母親と話し合い、A男の誕生会もすんだ次の次の日のこと 5月31日(月) 晴れ

登園時、母親が、一昨日の誕生会でもらったプレゼント(保育者の手作り、A男のいいところをいろいろ書いたカード)をA男がとても大事にし、1日中持ち歩いたとお礼を言う。

保育者が、1番最後に登園したU男のシール貼を手伝いながらN男と話していると、A男が「先生、ほら、雨だよ」と粘土で作ったものを持って来る。保育者が「まー、粘土で雨ができたの。面白いねー」とそれを受取り、U男やそばにいたM子やS子に見せ、「雨降ると、傘ささないね」「みんな、傘持ってる?。何色かな」などと聞くと、N男達は「持ってるよ」「青色」「僕、黄色」「雨降ると、カエル、喜ぶよ」「カタツムリモね」などと話す。A男は、そんな皆の話をおっとり聞いています。

- * 保育者が赤い雨や青い雨を描いたとき、「雨は白しかないよ」と言ったA男だが(記録Aの3)その後、A男が描いた雨の日の2回の絵には、2回とも赤い雨や青い雨が描いてあった。そして、この日も、A男は雨を作って保育者の所に来た。

記録 2 A男の方から保育者のところにやってくる 6月8日(水) 晴れ

登園時、保育者が、「おはよう」と言うと、こくと素直にうなづく。シールを貼ると、さっさと外靴を履いて外に出て、砂場の所で御馳走をつくり始める。保育者が、全員を受け止めた後、園庭に出ていくと、A男は、K男(記録Aの8 ブロックの剣でたたかれた子)と2人で並んで、テーブルに食器やフライパンを並べて御馳走を作っている。

保育者が、砂場の縁に腰を下すと、砂場やそのそばのテーブルで御馳走を作っていた子がお茶だとか御飯だとか言って作ったものを持って来たり、飛行機に乗っている子が「せんせー」と手を振ったりする。しかしA男もK男もわき目もふらず黙々と手を動かしている。少し離れた所にあるストアで御馳走を作っていた3人の女兒が、「パーティするから来て」と言って来たのでそちらに移る。一緒に付いて来たN子とI子と3人で指定されたテーブルに座っていると、A男が、フライパンの上に3、4個の食器を重ねて持ってきて

て、保育者の座っているテーブルに広げる。御馳走作りに没入していてもちゃんと保育者の動きは見ていたんだなと思って「先生、ここで御馳走できるの待ってるのよ」と言うと、A男は持ってきた食器にテーブルの下の砂を入れたり混ぜたりし始める。そして、保育者に「塩、持ってこい」「おれはな、酢がいるんだぞ」等と言う。その言い方はとてもぎこちない。いつもお兄さんに言われていることを真似しているのかなと思いながら、「はいはい、塩はこれでいいですか」などと応じていると、すぐ普通の「Aくんね」という言い方になる。

保育者の横に座っていたI子が、保育者に寄り掛かりながら、「てんていね。たねまつてんていって言うんでしょう。Iちゃん、Iちゃんのとんてい、たねまつてんていってわかったんだ」と言うと、A男は、「たねまつてんていだって」とフフフと笑う。

- * 眉をしかめて、保育者の言うことを否定したり保育者に要求したりしていたT男が、自分から保育者のそばに来るようになり、保育者に命令してみたりする。保育者のそばにいる友達の言うことも暖かく聞きいれる。いかっていた肩がほっと降りたような柔らかさを感じる。

しだいしだいに、こうなったんだと思うが、母親と話したことや、プレゼントに良いところをたくさん書いたことが、大きな1歩になったようにも思う。

記録 3 おたまじゃくしを殺し、雨垂れを頭に受ける 6月17日(木) 雨

朝から雨。元気の良い男児が、4年生のK学生^(注)とカメンライダーごっこすると行って遊戯室に行くと、多くの子がついて行く。A男もK男と一緒に走ってついて行く。

暫くすると、カメンライダーごっこに満足した様子の3人の男児が保育室に帰って来る。そして、テラスに置いてあったおたまじゃくしの水槽の所に行き、手でおたまじゃくしを捕まえたりトレーで追い回したり牛乳パックに入れたり水槽ごとタライに移したりして遊ぶ。そこへ、帰ってきたA男とK男が加わる。おたまじゃくしは、血がでたり潰れたりテラスにはおり出されたりするが、5人は夢中で遊び続ける。保育室で、他の子と遊んでいた保育者がそばに行って「可愛そうに。死んじゃうよ」と言うが誰も耳をかさない。保育者は、「おたまじゃくしさん、ごめんね」と言いながら、テラスでまだ生きているのを水槽にもどしたり死んだおたまじゃくしをきれいなトレーに入れたりする。5人は、暫く遊んだ後、満足したのか他の遊びを始める。

A男とK男は、屋根の樋から落ちてくる雨水を空容器に受け始める。容器によって音が違ったり、容器から水があふれる様子を面白がっている様子。その後、2人は、雨水が落ちてくるところに頭をつき出して頭で雨水を受ける。そんなことをしているうちに、洋服がびしょぬれになり、K男はさつさと着替えて他の遊びを始める。A男は1人で雨水を受け続けていたが、「先生、もう帰りたい」と言って来る。保育者が「そう、冷たくなったんでしょう。頭拭いて着替えようね」「A男君のタオル、どれかしら」と言うと、A男は、「ヒント、トがつくよ」と言う。「トねー」と保育者がわざと分からない様子で「第2ヒントを言ってくださいな」と言うと、A男は「キがつくよ」と言い、黄色いトラの絵のついたタオルを取る。保育者が「あ、トラの絵だからト、黄色だからキね」と言いながらタオルを受け取り、「頭、気持ち良かったでしょう」と言うと「うん」と元気に答える。保育者は、「A男君が、また熱を出しませんように」「A男君が休むと、先生寂しい

もんね」と言いながらしっかり頭を拭く。保育者が頭を拭くとA男は、ワイシャツの小さなボタンを手際よくはずし着替える。シャツも濡れているので「幼稚園のに着替えようね」と言うが、「いい、いい、大丈夫」とシャツは着替えない。着替えがすむとまた元気に遊び始める。

* 子どもたちは、おたまじゃくしやだんご虫やザリガニなど小動物にとっても興味を持つ。時には弄んで殺してしまいもあるが、そんな虫などがいる池や川や山が子どもたちの周囲に無いことや、そんな所に行って遊ぶ経験ができないような生活が問題だと思う。「可愛そうよ」と言う保育者の言葉などには耳を貸そうともしないで小動物を追い回して遊ぶ子どもを見る度に、小動物を殺したこともなく気持ち悪がって近寄ろうとしないような子どもに、生物に対する愛情や興味を持てるのだろうかと思う。

昨16日、A男は3輪車で園庭を1回りした後、ログ遊具の下で何か探していた。保育者がそっと様子を見に行くと、「ダンダンダンのダンゴ虫さん」と歌いながら、丸太の下を覗き込んだりして、保育者の気配に気付くとニッと笑ってだんご虫を掴んだ手をあげて見せてくれた。二星てんとう虫を見つけた時よりうんと楽しそうな雰囲気を見せていたし、「ダンゴ虫の足はね」などと言わないで「ダンゴ虫さん」と呼び掛けている様子が保育者にはとても嬉しかった。冷たく突き放して観察する前に、ポケットに入れて大切に持ち歩くような経験を持って欲しいと思う。おたまじゃくしを殺したり、頭で雨水を受けたりするようなことは家庭では許してもらえないことかもしれない。神経質だと思える程、きれいずきなA男がこんなことが出来るようになったことが保育者には嬉しく思える。

記録4 さめまつ先生への手紙 7月12日～15日(木) 晴れ

12日のこと、ガタガタ崩した積み木の場に、粘土や人形や布団やマジックや食器などを持ち込んで、そこで、4、5人の男児と2人の女児が遊んだ。その“おうちごっこ”らしきものは、次の13日には、おうちにカブトムシやカタツムリのはいった飼育箱や廃材をいれた籠まで持ち込んで続いた。

14日のこと、積み木をガタガタ崩したところでA男が遊んでいると、いきなりピアノの後ろから出てきたS男が「だめ」と言う。A男はびっくりしたように立ちすくむが、S男も真剣に「だめ」と言う。保育者にはその時初めて、S男が今日も“おうち”を作るつもりで何か取りに行っていたらしいことがわかる。遊びが、次ぎの日に渡って続くようになったんだなと思うとともに、A男にはそれは理解できないだろうなと思う。そこで、「S男君、どうしてだめなの」と聞いてみる。S男は、「ここ、僕が遊ぶところ」と言う。保育者が「わかった。S男君、今日もここに“おうち”作るんでしょ」「じゃ、A男君は『よせて』と言えればいいのかな」と言うと、A男は小さな声で「よせてって言ったよ」と言うが、そのままその場から立ち去る。

この日、“おうち”には靴箱らしい囲いを積み木で作し、そこに皆の靴が揃えてあった。そして、その“おうち”で描いた沢山の絵は籠に入れられて保育室の隅に置かれた。

15日、今日もS男とK男が、朝から“おうち”を作る様子。今日はただ積み木をガタガタ崩すのではなく、まず、最初に広いスペースを取ったところに積み木が1直線に並べられ、玄関か門らしきものから作られて行く。丁度積み木が並べられた時に、N子がひよい

と積み木をまたいで入って行くと、S男が「だめ」と言う。1昨日も昨日もそのメンバーに加わって遊んだN子は不思議そうに「どうして?」と聞く。S男は「隊長ごっこだから、だめ」と言う。N子は「よせて」と言う。S男はまた「だめ」と言う。そんなやり取りを聞きながら、やはり前々日からのメンバーであるS子が、紙と鉛筆を持ってひょいと積み木をまたいで入っていく。S男はS子には何も言わない。S男が「だめ」と言うので仲間入り出来ないでいるN子を、K男が引っ張り込もうとする。しかし、N子は、動かない。保育者が、そこに行き、N子とは1昨日も昨日も一緒に遊んだのになぜいけないのかとS男に尋ねる。S男は、「だめ、隊長ごっこだから、だめ」と言う。N子の目から涙がどっと出る。保育者は「S男くんだって、一緒に遊びたい時、だめと言われたら悲しいでしょう。N子ちゃん、悲しいんだよ」と言うが、S男は「いいよ、だめ言われたら違うところへ行くもん」と言う。

保育者が「そう、じゃ、今日は、N子ちゃん、先生ともう1つ、ちがう“おうち”作ろうか」と言うが、N子は「外で遊ぶ」と保育者に言ってテラスの方へ出て行く。しかし廊下をぐるーとまわって入り口の窓の所に行き、そこにへばりついてまた中を見ている。

保育者は「じゃ、今日は、S男君たちのお隣さんを作りましょう」「先生の“おうち”には誰でも入って来てください」と言いながらママゴトサークルを出したりゴザを出したりする。すると、I男が手伝い初め、N子も帰ってきて手伝う。1畳敷のゴザをママゴトサークルと椅子で囲んだ“おうち”が出来る。それを見てH男がもう1つのサークルを持って来て、もう1軒の“おうち”を作る。そこには、M子とU男が本を持って入っていく。3軒の“おうち”ができたことになる。

保育者が「さあ、“おうち”ができた。ここで、本でも作ろうかしら」と紙と鉛筆を持って来ると、I男とN子も紙と鉛筆を持って来る。そこへ、保育室のどこかで遊んでいたらしいA男が紙と鉛筆を持って来る。4人になると、おうちが狭いので、保育者は、もう少し椅子を持ってきて“おうち”を広げる。広げたところには、保育者とI男。ゴザにはN子が寝転び、A男はきちんと椅子を机にして座り、4人はそれぞれに何か書き始める。保育者が何か書き始めると、S男のおうちの子どもたち、H男のおうちの子どもたち、それに、机について作ったり描いたりしていた子どもたちまでも、何か書いては保育者に見せにくる。保育者は、椅子の上に空箱を置いてポストにし、手紙入れにする。ポストができると、時計やテレビを描いて持って来てままごとサークルに貼ってくれる子も出てくる。

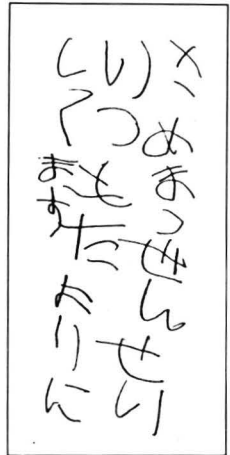
こうして、片付けの時刻までおうちごっこを楽しむ。ポストの中にはたくさんの手紙がたまる。きちんと、絵と文字をかいたもの、紙の切れ端にミミズのような字らしきものがかかれたもの、ポストに入れることが嬉しかったのか、ちょっと○など書いただけのものなどいろいろな手紙がある。

A男は、周囲の様子には少しも動かされず、きちんと座ってひたすら描き続ける。そして、おうちごっこが終わろうとする頃、「先生」と小さな自作のノートと1枚の画用紙を見せに来る。小さな紙をホッチキスでとめて作った8ページのノートには、1ページごとに違う絵が鉛筆で描き込んあり、『怪獣と僕』『ウルトラマンとウルトラマン』『S男君と僕』などと言う。画用紙の方にはマジックでたくさん顔や魚が画面いっぱい描いてある。

また、保育後、ポストを調べていると、何時入れたのか1枚の手紙が入っており、それ

には、『さめまつせんせい いつもたよりにしています』と書かれていた。

- * 保育者は、T男の手紙を見つけたとき、なんとませた文面だなと思った。しかし、そのうち、その文面の中には、T男の『その日のおうちごっこがとても面白かったよ』と言う気持ち以上のものが含まれているように思えてきた。そこには、14日に、S男に「だめ」と言われた時のT男の思い、そんな思いを味わった故に自分と同じ様な目に遭っているN子を思いやれたT男の思い、そして、強いS男の前でなにもできない自分たちの味方になりちゃんと願いをかなえてくれた先生への思い、などが込められているように思えてきたのだ。



(A男の手紙)

この日の保育者には、子どもたち一人ひとりの気持ちが分かったわけでもないし、おうちごっこを面白くするための見通しがあったわけでもない。ただ、N子になんとか手を貸したかったけれど、「だめ」と言うS男の気持ちが分からないのでどうしようもなく、どちらもが遊べるようにもう1軒のおうちを作っただけである。そこに、多くの子が参加して来て楽しいおうちごっこが展開したにすぎない。

それなのに、A男に、『たよりにしています』と言う便りをもらったことは、幼い故にたくさんの困難に毎日のように出会いながらも一生懸命生活しているクラスの子どもたちにとって先生は、頼りになる存在、願いが実現するよう手助けしてくれ、まわりの友達から守ってくれ、どうしていいかわからない問題を解決してくれる頼りになる人であれと教えてくれたように思えた。そして、A男は、幼稚園でこのような体験を積み重ねながら、心身と共に大きくなってきたし、大きくなっていくのだとしみじみ思った。

(2) 考 察

幼稚園の3歳児クラスの子どもにとってふさわしい生活や経験や体験、そして、それを支える保育者の関わりについて考える

(1) 幼稚園の3歳児クラスの子どもにとってふさわしい生活やふさわしい経験や体験とはどんなものであるかを考えるに当たって、A男の幼稚園での生活の様子を考察の対象としたのは、A男の幼稚園での生活の様子の中に3歳児クラスの子どもにとってふさわしくない生活、無理な生活を反映した姿があるように感じたからである。

そのように感じた姿とは、A男の

- (ア) 3歳児とは思えないほど器用に、創意工夫のある作品を作ったり、3歳児とは思えないような表現で絵を描いたりする。
- (イ) 3歳児にしてはできすぎると思えるほど、身の回りの処理ができたり片付けができるが、汚れることを嫌い、ずいぶん神経質である。
- (ウ) 3歳児によくあるアニミズム的なものにとらえかたをせず、科学的に正確なとらえ

かたをし、空想の世界に遊ぶよりずいぶん現実的である。

(エ) 文字や数に関する知識や図鑑的な知識が、3歳児とは思えないほど豊富である

(オ) 驚くほどの集中力や根気強さをみせるが、活動的に全身を使って遊ぶことを好まず静かな落ち着いた遊びをし、感情をともなった5感でものをとらえず、知的に頭でとらえる。

(カ) 自分のことは自分でし、頼ったり甘えたりしないが、ほめられても喜ばなかったり手助けを拒否したりして、人を受け入れようとしない。

というような姿である。

A男のこうした姿が、もし、明るい笑顔とともにあれば、そこに若干の疑問を持ちながらもA男の素晴らしい能力に感心し、それまでの自分の3歳児に対する認識を修正する必要があることを認めるに終わったであろう。

しかし、A男は、上に記したような素晴らしい能力を持ちながらずいぶん不機嫌で、いつも額にしわを寄せ、肩をはった生活をしていた。その姿に、私は、A男が家庭で、

- ・ 3歳児らしい自然な育ちを暖かく見守られながら伸び伸びと育っていないのではないか。
- ・ 頭の良さは大切にされているが、重い頭を支えるに耐え得るような体力を培ったり、全身で物事にぶつかり全身で物事を分かっているような生活が大切にされていないのか。
- ・ 理解力もあり器用でもあるがために、はやくから自分でなんでもすることを要求され、人にしてもらったり甘えたりする嬉しさや喜びを味わうことが少なく、それが人を受け入れる力を育てないことに繋がっているのではないか。

などと疑問を持ったのである。

(2) しかし、1学期を通してA男の様子を振り返ると、上述の私の疑問の中の多くは誤りだったように思う。

A男は、頭の良い、集中力や根気強さを持つ知的な子どもであり、近所に遊ぶ所も友達もいなかった。それ故入園前は、家の中で、A男と同じ様に知的な兄とともに、兄に影響されながら、自分の能力を生かして、作ったり描いたり本を見たりして静かに生活することで満足していたのだと思う。そんなA男にとって、急に始まったたくさんの子どもがいる幼稚園の生活は、騒々しく不安でいっぱい生活だったのであろう。そんな、騒々しく不安でいっぱい生活に急に投げ出されたA男は、自分のできる得意なことをすることの中になんとか居場所をみついていたが、できたものに満足する余裕はなく、不安定な気持ちを不機嫌に保育者にぶっつけていたのではなかろうか。人の気持ちを受け入れないなどという評価も早計で、この頃のT男には、まだそんな余裕はなかったとみるべきであらう。

そんなA男も、ありのままの姿を保育者に受け止めてもらったり、自分の得意なことをほめてもらったりするなかで、保育者に親密感を持つようになるとともに、友達に囲まれた生活に慣れ、しだいに友達のしていることに興味を持つようになった。そして、自分もやってみようとするようになり、今までしたことがなかったことなかに、いろいろな楽しさを味わうようになっていったのだと思う。汚れることを気にするよりも汚れて遊ぶ楽しさ、小動物を図鑑で調べるよりも、追い回して遊んだり集めたり大切にポケットに入れ

ておく楽しさ、じっと落ち着いて取り組んだり手先で作ったり描いたりするだけでなく体全体で飛び回る楽しさなどを。

A男にとって、大きな声を出して活動的に飛び回る力の強い友達は、『さめまつ先生、たよりにしています』と書かなければならないような怖い存在ではあるが、その友達のすることに面白さは感じてきたし、その友達のなかに一緒に遊びたいと思うような友達（K男）もいるようになった。

そんな生活が、1学期のA男の生活だったのだろうと思う。

(3) このようなA男の姿を通して、

<幼稚園の3歳児にとってふさわしい生活>、<幼稚園の3歳児にとって大切な体験や経験>、<そのような生活や体験や経験を支える保育者の関わり>について考えてみる。

A男にとって

・ふさわしい生活とは、

A男が自分から自分にとって必要で楽しい経験や体験を、自分の仕方や自分のテンポでできる生活であり

・ふさわしい経験や体験とは、

A男が自分で選び取り自分からしようとした遊びであり、

・こんなA男にとって必要だった保育者の関わりは

(ア) A男がありのままの自分を保育者の前に出すことができるようになっていったことをそのまま受け止めること、

(イ) A男が、自分の得意なことをすることで安定できるようにすること、そして、それを保育者がしっかり認めること、

(ウ) さらに、多くの友達に囲まれている状態に、A男なりのテンポや方法で次第に慣れていけるよう支え見守ること

だったように思う。

このA男にとってという言葉、幼稚園の3歳児にとってという言葉にそのまま置き換えてもいいと考える。そして、その言葉の次に、

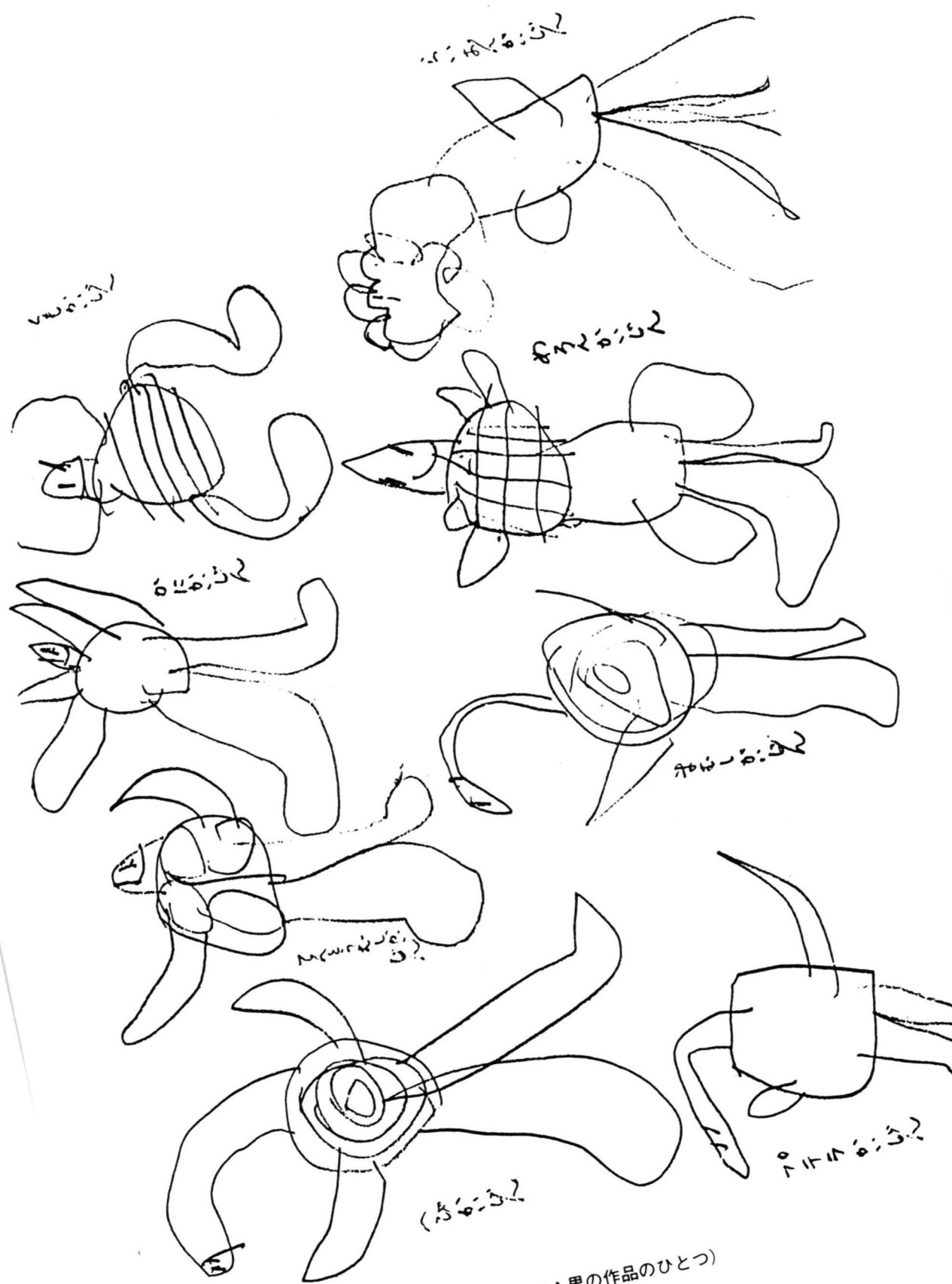
<具体的な遊びの姿や保育者の関わりの姿は、一人ひとりの子どもにより、みんな異なるのであり、その具体的な姿こそ大切である>、ということと、<子どもにとって無理がない生活であるかどうかは、感覚的な表現になってしまうが、子どもの笑顔や柔らかい振る舞いを通して伺える>ということをつけ加えたい。

IV おわりに

A男が、幼稚園の友達と一緒に生活する中で、伸び伸びと自分を発揮し、自分の得意なことを十分にし、友達に影響を受けながら自分の世界を広げていくのはこれからである。

2学期、3学期と引き続きA男の生活の記録の考察を通して、本論文での問いを考え続けていくつもりである。

注) K学生は山口大学教育学部の学生。1年間、1週に1度、卒論のため保育に参加していた。



(1学期末のA男の作品のひとつ)